

自分も楽しかですが、
相手が喜んでくれるのが
何より嬉しいですよ。

夢 追 い 人

『若津にわか保存会』のみんさん

6月22日の夜、向島6丁目公民館を訪ねた。『若津にわか保存会』の皆さんにお会いするためだ。忙しいところインタビューのためメンバーのうち5人が集まってくれたのだ。

保存会委員長の内田茂弘さんがにこやかに迎えてくださった。「いらっしやい。まあ、どうぞ、どうぞ……」

ほか4人のメンバーも手招きをしつつ、気さくに声をかけてくださる。「なるほどさすがに『にわか』をされておる方々だ。朗らかだな。」と感心ながら、部屋に入った。

「にわかをやっているよかったですと思うところは……？」
「そりゃー、人間性が明るくなるんですよ。ハハ。にわかの特徴は『おち』があるところですけど、普段の会話にも自然と出るよ

うになつてですよ。場がなごやかになるケンですね。エエ」と内田さん。

たたみかけるように村石さんが「自分も楽しかですが、相手が喜んでくれるのが何より嬉しいですよ。快感ですね!」と続ける。

冷川さんに目を向けると、「目を細めつつ」性格が変わつてこですよ。田中末男君なんか、始める前までは超短気だったのが、今じゃ、丸るううなつたですよ。」と屈託がない。「冷川さんご自身は?」「まああ、有名人になれるところでしょうか。アハハ」

入ったばかりの古賀勲次さんは、控えめに、でも嬉しそうに会話に聞き入っている。
こんな風に、インタビューは終始和やかに進んでいく。

大川市の伝統芸能「若津にわか」は、二百数十年の歴史があ



るといわれる。
一九五〇年代の後半まで、若津地区を中心に広く親しまれていたが、今ではその名前すら知らない人が増えている。

その起源ははっきりわかっていない。が、十八世紀半ばに若津港を開いた旧久留米藩主の有馬頼重をもてなすために、町民が演じていた、というのが通説になっている。

そのほかに明治以降、船頭がもたらしたと、いう人もいる。遊郭を中心に広がった宴会芸というわけだ。

いずれにしても、当時多くの「名人」も生まれるほど盛んだった。祭りの際、地元の町内会が順番に当番になり、数十人の若者が



田中 末男さん



古賀 勲次さん



冷川 清さん



内田 茂弘さん



村石 敏明さん



境内でにわかを披露するほどだったそうだ。

若津にわか保存会は、この伝統を復興させるため、区長の要請で1995年に発足した。現在4町内から8町内までの町から財政的な支援を得ている。メンバーは9名。

若津にわかには、2つのパターンがある。一つは、「二人にわか」。二人二役を演じて「落ち」もきかせる。落語と違って、舞台の場所を入れ替わり立ち替わり動き回りながら交互に2人を演じるから動きが忙しい。こんな風だ。(ネタ帳から二つ拝借)

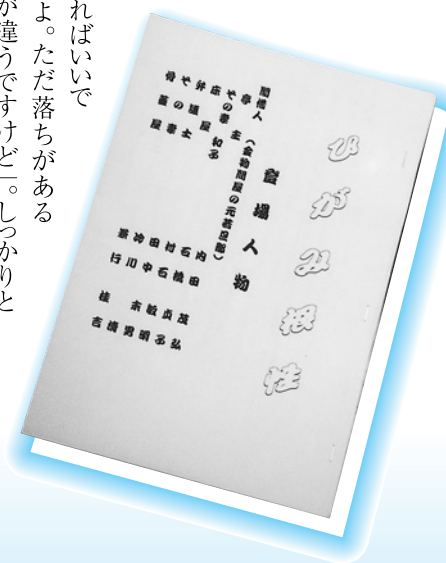
A「お前は、今度借りたマンションにいくら家が家具屋ちゃんば何組でん持って行って狭か所におさまるもんか」

B「ところが、いまは大川家具も団地サイズになっとるけん、それでもなかなバイ。ほら見てんかい。ちゃあんとおさまっとろが」

A「ほんなこと。こりゃあしやれた部屋でちようど(調度)よか。」(笑い)

もう一つのパターンは、メンバー全員で演じる『舞台にわか』。

「吉本新喜劇を連想してもら



えればいいです。ただ落ちがあるのが違うですけど。しっかりとした台本が準備されている。もともと本番ではアドリブが飛び交うそうだ。

ちなみに昨日初めて本読み練習した新作『にわか』の題は、「ひがみ根性」。表題を見ておかしくなった。

「それと、別の特徴は舞台上に登場するとき、日本舞踊のように扇子を回しながら入つとですよ。」見せてもらったが、美しい装飾の扇子が実になめらかに、しかも滑稽に舞う。筆者も挑戦したが、なかなかうまくいかない。でも「なかなか筋がいい」と外交辞令をいただいた。

メンバーはこの郷土芸能をきちんと後世に伝えたいと意気込んでいる。「若津に三味線や太鼓の使い手がいるうちに、若い人に伝えたい。そのために今われわれがしっかりと芸を身に付けなければ…」と語る、内田さんの優しい目が一瞬けわしくなった。

